

◎令和3年産米づくりのポイント <土づくり～移植期まで>

〈環境づくり〉

○有機物やケイ酸等土づくり資材を投入しましょう。

土づくり資材投入は異常気象に負けない稲体をつくります。

○耕深 15cm を確保し、健全な根の生育環境づくりを行いましょ。

〈健苗づくり・適期移植〉

○充実した苗づくりを。田植え日に合わせ計画的に播種作業を行いましょ。

育苗中の病害・温度障害が増えています。こまめな温度管理をしましょ。

○適期移植を行いましょ。

5月15日～20日を目安とした適期移植に努めましょ。

○適正な栽植密度、適正植え付け深で田植えを行いましょ。

適正栽植密度は㎡あたり100本。【70株/坪：植え込み本数は4～5本に揃える！】

植え付け深は3～4cmとして分けつ促進しましょ。

◎種子予措

～まずは良い苗づくりからスタート！～

1. 塩水選

- ・塩水を作る際の比重は、うるち1.13、もち1.08で行います。
- ・塩水選後は、きれいな水でよく洗いましょ。

	比重	水10ℓ当り食塩の量(目安)
うるち	1.13	2.1kg
もち	1.08	1.3kg

◎作業の前に「比重計」や「卵」などで確認を！

2. 種子消毒

①薬剤処理の場合

- ・必ず使用方法(希釈倍数、使用時期、使用方法)を遵守しましょ。
- ・薬液の温度が低いと効果が劣る場合があります。10℃以上の水温を確保しましょ。

②温湯浸法の場合

- ・58℃20分間又は60℃15分間で行います。直ぐに冷水で冷やし、水漬けに入ります(ただし古い種子やもち品種は発芽率低下の可能性が有ります)。

3. 浸種 ～温度計で温度の確認をしましょ～

①浸種開始の10℃以上(ただし15℃未満)になるよう調節しましょ。

②浸種開始時の水温が低すぎると、発芽率が低下することが有ります。

- ・水温10～15℃で8～12日間程度行います。積算水温で120℃(モチは100℃)を確保します。播種日から逆算して水漬けを始め、必ず水温を確認しましょ。
- ・2～3日毎に水交換を行い、袋の位置(上下)を入れ替えて吸水ムラを防止します。

4. 催芽

- ・催芽は、30～32℃で20時間を目安とし、ハト胸状態を確認して終了しましょ。

◎ 播 種 ～良い苗を適期に植えられるよう計画的に～

- ・苗の老化は、活着不良や初期生育が遅れる要因となります。
田植えの計画に合わせて播種日を決めましょう。
- ・10a 当たりに必要な苗箱数は、稚苗で 25 箱、中苗で 30 箱が目安です。
(疎植は茎数不足、籾数不足、玄米タンパク質の上昇のリスクがあります。)

◎作業時期の目安【5月20日田植えの場合】

苗の種類	播種量 (乾籾 g/箱)	水漬け日	催芽日	播種日	育苗期間	葉数 5/20
稚苗	150～180g	4月12日	4月24日	4月25日	20～25日	2.5枚
中苗	80～120g	4月2日	4月14日	4月15日	30～35日	3.5枚

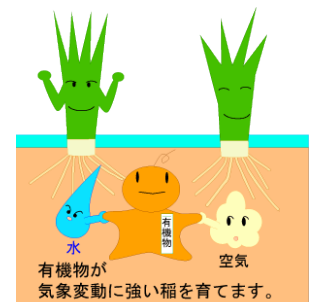
田植え日から逆算して
計画的に！

◎ ばか苗病対策 ～育苗床の周りにモミ殻などありませんか～

- ・ばか苗病を保菌している稲ワラやモミ殻、施設や機材に付着した菌などが感染の原因となることがあります。育苗ハウス内や資材をきれいにし、種子や苗を置く周辺の稲ワラやモミ殻は必ず撤去しましょう。前年ばか苗病が多発した場合は特に念入りに確認を！
- ・水漬け温度が 15℃を超えるとばか苗病の発生を助長する場合がありますので、水温に気を付けましょう。特に日の当たる場所に水槽がある場合は要注意です。

◎ 土づくり ～天候不順に負けない、おいしい米づくりは、「土づくり」から～

- おいしいお米を生産するためには、「土づくり」をしっかり行い根の活力を高め、必要な時期に十分な養分を吸収できるイネづくりが重要。
- ・堆肥などの有機物を適正に使用しましょう
(堆肥の種類や施用量に応じて基肥は減肥しましょう)
- ・土づくり肥料の積極的な散布を心掛けましょう
近年の土壌分析結果では、pH が低く、ケイ酸が不足気味です。石灰資材やケイ酸資材を積極的に施用しましょう。
- ・根圏耕土層を改善するため、耕深は 15cm を確保しましょう



春季農作業事故防止強化期間 4/10～6/10

- ・積雪量を考慮し、育苗に支障のないように準備しましょう。
- ・計画的に余裕をもって農作業に取り組みましょう。
- ・農機具の点検を行い、未然に事故を防ぎましょう。